

あけのほし 2014年8月

## 「降りて行く人生」

菊田行佳

「ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。』ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。」

(ルカ福音書18章10—14節)

他の人の意見に左右されずに、自らの考えに基づいて、誰に対しても接したい。これがわたしの考える自立した一人前の大人の姿でした。

しかし、自分の意見というのは大変曖昧なもので、その場の雰囲気が変わってしまうこともありますし、その時影響された人物などによって、大きく変遷してしまうものであります。そこで、キリスト教信仰に至ってからは、自らの中に判断の基準を置くのではなく、神の意志にその考え方の方向性を見出して行くということに変わって行きます。すなわち、それまで自らの意志によって自身を律し、社会に向かって自立をして行こうという姿から、神の意志によって方向付けられ、神によって立たされる「神立」という姿に、人生の歩み方を変えたのだということです。それまで、「わたしの考えでは、このように考えます」としていたのを、一旦、「わたし」を脇に置いて、神の意志に聞いてみるという作業を入れるようになりました。

キリスト教では、神の意志は「聖書」の中に、記されていると信じています。特に、2千年前にパレスチナに現れたナザレのイエスという人物を、神の独り子であると信じ、イエスを通して神はご自分の意志を十全なかたちで顕わにされたのだと信じています。ですから、「聖書」の中のイエスの言葉や行いは、そのまま神の意志が最も良く表されているのだと、受け取るのです。よって、キリスト者となったわたしは、それらのイエスの言葉や行った出来事の意味を真剣に吟味し、そこから神の意志がなんであるのかを、くみ取ろうという生き方に移行したのです。

もちろん、その「聖書」に記されているイエスの言葉や振る舞いを、読み取って理解するという作業が必要なわけなので、最終的には自らの責任で解釈をしているわけです。ですので、そこから判断した責任は、やはり自分自身で取らなくてははいけないわけですが、それでも自立を目指していた時とは違って神によって立たされて行くという行き方は、ある一本の方向を示してくれたのです。

それまでの「わたし」の価値基準というのは、「わたし」という狭い視野の枠組みからすべて出てくるものであり、どうしても「わたし」の枠組みを超えることが出来ないままで

した。ですから、一旦否定的な思いに捕らわれてしまうと、そこから抜け出すことが出来ずに、苦悩の中を堂々巡りに陥るといふことになりやすかったのです。また、逆に自らの正しさを主張し始めると、その正しさから抜け出せずに、他者を裁いて責めるといった姿勢から抜け出せなくなってしまうといふことがあります。その姿が、まさに冒頭の聖書の箇所に出てくるファリサイ派の人の姿です。

彼は確かに、当時の一人前の大人として、人並み以上に社会的な責任を果たしていました。そして、不正を行わず、悪から遠ざかる正しい生き方をしていたのです。しかし、彼はイエスによれば、神の意志に照らし合わせると、決して「正しい」姿勢ではないといふのです。それは何故でしょうか。それはおそらく、徴税人といふ当時における社会的に評価の低い人物を、見下していたことに起因しているのだと考えられます。徴税人は確かに社会的な不正を働いていて、倫理的な基準からいえば、悪人でありました。よって、ファリサイ派の人が、その不正を良くないことだと思ふことは、決して間違つてはいないことです。しかし、相手の不正や悪に対して誤っていると考えることと、その人の人格をすべて否定することとは、別のことだといふことであるのでしょう。彼に足りなかつたのは、相手の徴税人の立場に立ったまなざしであつたのではないのでしょうか。

始めから悪人になろうとか、他人を苦しめようと考えている人といふのは、いないでしょう。人生のどこからか、そのような方向に方向付けが為されるのです。もちろん、自分の意志が弱かつたこともあるでしょうが、それだけでは説明がつかない、深い事情といふものが、それぞれあるのだと思ふます。神の意志は、普段は考えることのない、不正や悪を行う人々の心の底に沈んでいる、そうせざるをえなかつた深い事情といふものに、目を向かわせてくれます。「わたし」といふ狭い枠組みから見た景色ではなく、その外側に立たせて、普段とは違つた世界を見せてくれるのです。

この聖書の箇所を読む時、わたしがファリサイ派の人と同じ姿になつてしまつていくことに、ハッと、気付かされることになるのでしょう。そして苦い思いと共に、このファリサイ派の人と同じ所に立つてはいけなかつたのだと、促されるのです。そして渋々ではあつても、自らの不正に苦しんでいる徴税人のところに、降りて行くことになります。そして今度は、隣人の立場に立てない想像力と思いやりが麻痺してしまつていく自らのいたらなさを、情けなく思ふ所に立つことになるのでしょう。すると、徴税人と共に、『神様、罪人のわたしを憐れんでください』といふ、祈りが口から発せられるのではないのでしょうか。

神の意志によつて自らの歩む方向を決めて行くといふのは、わたしの枠を越えさせてくれます。特にそれは、立派な人間になつて、誰からも批判されなかつた完全な者になつて行くといふことから解放してくれるのです。そのこととは反対に、わたしがいつの間にか人の上に立つて、目が見えなくなつていくところから、一段一段降りて行き、世界が見えるよふになつて行く方角に向かわせてくれるのです。そうして、自らの低さを受け入れることが出来た時、わたしはきつと、他人の基準から解放された、まっつき自由に入れるのではないかと思ふます。それが本当の意味で自立した人間なのだといふのでないではないのでしょうか。